

自立しないテーブルを、表現者が「第三の脚」として支え、キング軸をつないでいく。

足と脚

— Richshaw Table —

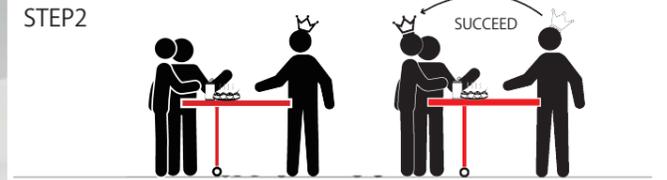
人間の足、テーブルの脚



テーブルデザイン・コンセプト

テーブルを連結したときの様子。横並びにすることで屋台のような雰囲気演出。

テーブル利用の様子。集まった人々がテーブルを囲むことで通りに賑わいを生み出す。



•キングとキング軸の人々が繋がるプロセス

STEP1: キング軸にいる人々に気づいたキングがテーブルを持って移動

STEP2: テーブルを使ってみんなとストリートで飲食を楽しむ

人間の足がテーブルの脚になる

テーブルには2本の脚しかついていない。表現者である“キング”が自らテーブルを持ち3本目の脚となることで初めてテーブルとして成り立つ。キングはテーブルの一部となりながら、利用者との交流を生み出す。人間が部品であるからこそ、“交流”もこのテーブルの機能になる。

表現者であるキング

このテーブルの部品となる人間を“キング”と呼ぶ。キングは目印となる王冠を被り、テーブルの脚となり、利用者と交流していく。まずは提案者である自分達自身がキングとなりながら、利用者へこの王冠を渡すことで、渡された人がキングになる。王冠の受け渡しキングの交代によって利用者を表現者側へと巻き込むことが出来る。

「可動」と「連結」

キングは通りにある賑わいを見つけるとテーブルと一緒に移動することができ、自由自在に人々の交流の場へと入り込むことができる。キングが好きなように移動することで軸を訪れる人々を混ぜ合わせ、テーブルをきっかけにした偶発的な出会いや出来事が生み出されていく。また、アートテーブル同士を連結させることで屋台のように様々な顔が横並びになって人々の前に現れ、線の賑わいを生み出す装置としての役割を果たすことになる。

キング軸における利用・コンセプト

現況のキング軸

キング軸でのアートテーブル制作を計画する前に、現在のキング軸の使われ方について観察をおこなった。その結果、新高島駅周辺は資生堂、京急などのオフィスビルが建ち並ぶエリアとなっていた一方で、海側の建物の多くは高層マンションなどの住居系となっており、両者は直線で結ばれているものの、景色の変化やすれ違う人の様子のちがいに富んだ通りであることがわかった。また、この2つのエリアを相互に利用する人の数はまばらであり、キング軸が地域交流の拠点になっているとは言い難いのが現状である。

①オフィスエリア ②高島中央公園 ③住居系エリア



(左) 横浜駅方面から続く歩道橋との結節点 (中央) 高島中央公園を貫くキング軸 (右) 臨海部へ続くマンション群 (下) キング軸周辺のゾーニング

軸で重なる人間関係

現在のキング軸には軸としての認知や、そのアクティビティが少ない。オフィスエリア、住居エリアなど多様な顔を持つ通りとして、多様な人々が繋がるしなやかさを創ることを目的とし、周辺の飲食店や屋台から持ち寄ったものを同じテーブルで囲む。また、テーブルを持ったキングが人々との交流を待つ姿は、何気なく過ぎていた地域の人、来街者へ違和感を覚えさせ、キング軸への興味を持つきっかけを与えるとともに、現況のキング軸の課題でもあるオフィスエリアと住居系エリアの交流機会創出のきっかけ・つなぎ役になる。



(上) 高島中央公園におけるアートテーブル利用時の様子



チーム名 しんきんぐ

岩屋百花 川田真史 鈴木亮太 中村元 沼尾航平